第 33 回
歯科保健医療国際協力協議会
総会および学術集会
プログラム・抄録集

The 33rd Annual Meeting of Japan Association of International Cooperation for Oral Health

歯科国際協力の未来像とは

🌎学術大会プログラム🌎

13:00～　開会挨拶

13:10～
☆ 特別講演
『歯科国際協力の未来』
深井 穫博 先生 （ネパール歯科医療協力会）

14:40～　団体発表
☆ VTR 発表
・**「30 年続くモンゴルとの歯科医療協力」**
―激変する草原の国で何をし, 今どうなっているか―
黒田 耕平　先生 （日本モンゴル文化経済交流協会 ）
☆ 口　演
・**ROSAS Rotary Operation Share a Smile**
ロータリー 一緒に笑顔大作戦　フィリピン口唇口蓋裂手術ボランティア
河野 伸二郎　先生 （神奈川歯科大学南東アジア支援団）
・**サモアでフッ化物洗口**
古瀬 大治　先生 （ルマナイサモア）
・**Think Globally, Act Locally. デンタルミラーから世界を見る**
～長期・短期国際ボランティア経験から学んだことを今に活かす～
藤瀬 多佳子　先生 （大分県口腔保健センター）
☆ 紙面発表
・ 沼口 麗子　先生 (カムカムクメール)
・ 根木 規予子先生 (ネパール歯科医療協力会)
・ 内田 千鶴　先生 (南太平洋医療隊)

16:10～　ディスカッション

16:40～　閉会挨拶

※ 11:00～理事会, 12:00～総会を同会場で開催

2023 年度　歯科保健医療国際協力協議会
総会・学術大会を開催するにあたり

2023 年 7 月 2 日

歯科保健医療国際協力協議会は，コロナ禍の中 2022 年 7 月 3 日に学術大会長　相田潤先生のもと学術大会を WEB で開催しました。

その後，本年 2023 年 5 月 5 日には，WHO が COVID-19 に対して 2020 年 1 月に発出された「国際的に懸念される公衆衛生の緊急事態宣言（PHEIC）」終了を発表しました。3 年 3 か月ぶりの緊急事態宣言の解除でした。わが国においても，5 月 8 日には，新型コロナウイルスの感染症法上の分類を季節性インフルエンザと同等の「5 類」に引き下げられました。このことによって，3 年以上にわたる海外への渡航制限も概ね解除され，それまで活動の制限を余儀なくされていた国際協力活動もコロナ前の状況に戻りつつあります。

このような背景から，2023 年度は学術大会を皆様の出席下で開催することが可能となりました。テーマは「歯科国際協力の未来」です。

特別講演は，ネパール歯科医療協力会　深井穫博が「歯科保健国際協力の未来」について講演をいたします。また，学術プログラムの中で，本協議会を構成する各団体，個人より多くのご講演をいただきますことに感謝を申し上げます。

歯科保健医療国際協力協議会は，歯科保健の国際協力をする会員・諸団体の次世代育成を含め，情報を交換しお互いの国際協力について語り合う交流する場としての役割を果たしていきたいと考えています。会員，各団体，参加された多くの皆様には今後ともよろしくお願い申し上げます。

歯科保健医療国際協力協議会（JAICOH）
河村康二，白田千代子，深井穫博

☆特別講演

『歯科国際協力の未来』

深井 穫博
ネパール歯科医療協力会

歯科保健国際協力協議会（JAICOH）は，1990 年 9 月に「歯科の国際保健医療協力を語る会」を前身とし名称変更して設立された。初代会長（村居正雄先生）のもとで歯科保健医療を中心とした国際協力の立案，実施を行うとともにその背景にある栄養・食生活の改善について調査協力を行うことを目的に活動が開始された。当時，わが国で歯科に関わる国際協力を行う多くのNGO団体が設立されたことがその背景にあった。

2000 年からの 10 年間は，2 代会長（深井穫博）への交代を契機にその活動方針の変更を行い，わが国の歯科保健医療の国際協力を行っているNGOと個人の情報交流の場となること主な目的として再出発した。具体的には，学術集会およびフォーラム・ワークショップの開催を通じた関係者の情報交流の場を提供することであり，各団体の活動を一覧できる国際歯科保健医療 NGO ダイレクトリーが創刊された。人材育成の観点からも多くの歯科学生が参加するようになった。その後，このような方針のもとに，会長が引き継がれ現在にいたっている。

この約 35 年の間に，国際保健を取り巻く環境は大きく変わってきた。その概念は国際保健からグローバルヘルスへと代わり，プラネタリ―ヘルスという考え方も提唱されるようになってきた。この間，共通する目標は健康に関する格差の縮小にある。2001 年には貧困の撲滅，初等教育の普及，健康課題の解決など国際社会共通の目標であるミレニアム開発目標（MDGs）が公表された。しかしその後，なお格差が拡大する現状を踏まえて，2015 年 9 月の国連サミットで採択された文書「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」で 17 個の目標と 169 のターゲットが明記された。その理念は「誰一人取り残されない no one will be left behind」社会を目指すことにある。

口腔保健に対する国際的な関心も急速に高まっている。2019 年に Lancet 誌に口腔保健特集が発行されたのを契機に，2021 年 5 月 27 日第 74 回 WHO 世界保健総会では口腔保健に関する決議が行われた。それは 2030 年に向けたユニバーサルヘルスカバレッジ（UHC）と非感染性疾患（NCDs）のアジェンダの一環として，より良い口腔保健を達成するという決議であった。これを受けて，2022 年の WHO 年次総会で global strategy on oral health が採択されると共に，Global oral health status report が出版された。そして本年 2023 年

5 月のWHO年次総会で, Global oral health action plan（2023-2030）が採択され, 2030 年までの口腔保健に関する世界共通の行動計画が示された。

このような急速な変化の中で, 私たち歯科口腔保健関係者は, 国際協力にどう向き合えばよいのか。そのひとつは, 一人一人の個人が社会とつながる喜びを再認識することにある。限られた社会資源のなかで持続可能な健康に関する格差是正を図るには, GO, NGO という団体・組織の活動はもちろんなくてはならないものであるが, もっと大事なことは一人一人の個人が, 社会と, そして世界と繋がっていることを再認識することである。2017 年にノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロの授賞理由は, 彼の小説が「私たちの世界と繋がっているという幻想に隠された深淵を明らかにした。 *“who, in novels of great emotional force, has uncovered the abyss beneath our illusory sense of connection with the world”* 」であった。一人一人が社会と繋がっているのは, 幻想でも闇でもない。それは未来に向けた光である。

略歴

1983 年　九州歯科大学歯学部卒業
1985 年　深井歯科医院院長（～現在）
2000 年　歯科保健医療国際協力協議会（JAICOH）会長
2001 年　深井保健科学研究所所長（～現在）
2010 年　（一社）埼玉県歯科医師会理事（2013 年同常務理事）
2013 年　（公社）日本歯科医師会理事（2015 年同常務理事）
2013 年　（公財）8020 推進財団専務理事
2015 年　FDI Oral Health for Ageing Population Task Team, 委員長（～現在）
2017 年　経済産業省東南アジアオーラルヘルスケア向上支援プロジェクト専門家（～現在）
2021年　ISO:TC106,SC7,WG3,4,10エキスパート（日本代表）（～現在）

その他現職

大　　学：客員教授（神奈川歯科大学）, 非常勤講師（日本大学松戸歯学部, 東北大学, 新潟大学, 大阪歯科大学, 鶴見大学）
研究機関：客員研究員（国立保健医療科学院）
学　　会：日本口腔衛生学会（副理事長）, 日本保健医療行動科学会（理事）, 日本健康教育学会, 日本国際保健医療学会（監事）
そ の 他：ネパール歯科保健医療協力会会長

☆団体発表

31 年続くモンゴルとの歯科医療交流
―激変する草原の国で何をし，今どうなっているか？―

日本モンゴル文化経済交流協会
黒田　耕平（和博）

モンゴルとの交流の始まり；

モンゴルという国は，「地平線の彼方まで続く緑の草の絨毯と，色とりどりの可憐な花々に埋め尽くされたなだらかな丘陵，あくまでも高く吸い込まれそうな蒼穹の空，自然の大きさと豊かさ，歴史の重み，儚いまでの人間の卑小さ」，様々な思いを抱かせる魅惑的な国でした。

大阪にある日本モンゴル文化経済交流協会（会長；佐藤紀子）の誘いで，両国の市民レベルでの草の根交流の第 1 回目として 14 人の日本人歯科関係者が，1991 年 7 月 初のチャーター便でモンゴルの地を踏みました。首都ウランバートルは，車や信号も少なく，街中を民族服の騎馬民や，牛・羊などの家畜が闊歩する長閑な街でした。当時はペレストロイカ直後の混乱期にあり，市場にも物が少なく，パンや小麦粉などの配給品も滞る状況で，民間のホテルでの夕食は白飯に砂糖をかけた 1 品だけということもありました。しかし，街中で観光客目当ての土産物売りや物乞いをする人は皆無で，みんな純朴で，やさしく，国に対する誇りを持った人達でした。

初めて（おそらく日本人がモンゴルで行った）の歯科検診は，4～68 才の 99 人（カルテの回収できた分），職業比率は医療従事者 11%，技術者 19%，労働者 25%，学生 26%等が対象でした。各年代とも，歯列不正の割合は各年代とも少なく，30 才以上では8番までしっかりと噛んでおり，40 才以上では咬耗が 100%見られました。一人平均 DMF 歯数では，20 才代を除き日本人の方が悪い結果でしたが，これは日本人は処置歯数が多いためと考えられます。当時 2，3 年間の首都と郡部での歯科検診結果では，一人平均う蝕歯数は郡部では半分以下でした。

モンゴルでは，何千年もの間主食は肉と乳製品でしたが，1921 年に世界で 2 番目の社会主義国として建国されてからウランバートルの都市化と共に定住生活者が増え始め，1970 年代ごろからパン食が一般化したとのことです。食生活や定住生活の影響は，1990 年の市場経済移行によって加速的に国民の健康を悪化させ，都市部ではう蝕の急増が起き始めていた時でした。

私達のホテルを訪ねてきた当時厚生次官ダシツェベク氏から「モンゴルの歯科医療と公衆衛生の向上のために協力して欲しい」という要請を受け，モンゴルの歯科疾患予防のための長期継続交流は始まりました。

モンゴルの歯科事情；

【モンゴルの歯科教育】

モンゴルは 1921 年世界で 2 番目の社会主義国となり，1979 年に国立医科大学が開設されるまで歯学部もなく，ソビエトや東ヨーロッパ，キューバ等へ留学して歯科医師を養成していました。国立医科大学歯学部は，5 年制で 1 学年 25 人でしたが，2020 年から 6 年制の学生が卒業し，現在入学生は約 120 人となっています。私立歯科大学は今も 5 年制で，1998 年に 1 校，2014 年 1 校，2016 年 2 校が開設され，現在合わせて 4 校となり，5 大学の歯学生は 1 学年約 700 人を超えています。

歯科技工士学校は，1938 年からロシア人の指導で 3 か月や 6 か月のコースが開かれ，1965 年に初めて医科学専門学校が 3 年制で開設されましが 1990 年には停止されました。その後，1998 年に 3 年制で再開され，30 人前後が卒業しています。

歯科衛生士学校は，2010 年に 4 年生で開設されましたが 2015 年には停止され，2016 年からは 3 年制で再開されていますが卒業生は 2019 年は 6 人しかいなかったそうです。

【モンゴルの歯科医療】

モンゴルは国土が広く人口密度も世界最少であることからも，郡部の歯科医師は非常に少ない。さらに首都でも急増する人口（約 150 万人）と歯科疾患により，歯科医療の供給は著しく不足していました。歯科医療は 1992 年ごろから私設開業が認められ，殆どが私費診療のため開業医の収入はかなり高くなっており，歯科大学を志望する学生は非常に多くなっています。そうしたこともあって，歯科大学が次々と認可されてきましたが，その歯学生教育はとても満足できるものではありません。新設大学の教官の多くは卒業間がなく，学生数からも実習設備はほとんど揃っていないという状況です。今後急激に増える歯科医師の質が問われる事態が来ると思われます。現状でも，歯科治療に追われる歯科医師達のうちで，歯科予防や公衆衛生に目を向けるものは少数です。今後モンゴルでは，歯科治療でも歯科予防の面でも憂慮すべき事態が来ると思われます。私達は，モンゴルの歯科医療と公衆衛生の向上のために，歯科大学でのセミナーや歯科予防活動等の継続した交流を行っています。

モンゴルとの歯科医療交流；

モンゴルでは，1990 年以前の社会主義時代の歯科医療は，国公立の病院内診療室（ほとんどが歯科医師 1 名）で治療を行っていただけで，歯科の公衆衛生や学校歯科保健は行われていませんでした。私達は，1991 年 7 月から日本モンゴル文化経済交流協会の呼びかけで，「モンゴル人の健康はモンゴル人自身の手で」をコンセプトに歯科医療交流を始めた。当初は，首都と地方の医療関係者とともに歯科検診や予防活動を日本人が「やってみせる」活動を行い，行政やメディア，学校，病院等へう蝕実態と予防の啓蒙を行いました。2000 年からの 6 年間は，「歯科予防プロジェクト」を全国 21 の県から歯科医師を集めてセミナー，実習を行い，全国へ歯科実態調査と予防を広める活動を行いました。2007 年からはプロジェクトに参加した県を回り，現地の保健局，学校，歯科関係者，メディア等と共に「一緒にやる」活動を行ってきました。また，う蝕予防パンフレットや乳幼児向けの歯磨き絵本と寝かせ磨き解説 DVD を作製し，配布しています。

モンゴルの歯科医療と公衆衛生の向上のための取り組み；

1994 年には首都に日本と共同の「エネレル歯科診療所」をモンゴルの歯科医療と予防の先駆的基地として開設し，これまで述べ 60 人以上の職員（歯科医師，歯科看護師，歯科技工士，技術者等）を
短期日本研修として受け入れてきました。エネレルは今ではモンゴル人の手で運営され，日常診療や予防，公衆衛生活動とも「自らでやる」ことができています。

モンゴル医科大学とも 1992 年以来セミナーや実習等の交流を続け，1994 年には岡山大学歯学部と交流協定を結んで大学院生の受け入れ等も行ってきました。

今後のモンゴルでの歯科予防の取り組み；

モンゴルでは，まだ学校歯科保健の取り組みは十分ではありません。私達は各 1 校選択し幼稚園 3 才児，小学校 1 年生から 3 年間，先生，校医，教育省担当者達と協力して歯科保健予防活動も行っています。

今後は，歯科や教育大学生への歯科保健教育や実習の導入や教材や予防パンフ等での協力を行っていくこと，医科歯科関係者，行政，教育者，保護者達と協力しながら歯科予防活動を行うことで，さらに歯科疾患の予防に努めたいと考えています。

参考資料；

・「歯科探検隊が見たモンゴル歯科事情」歯科衛生士　Vol.16　No.3／1992
・「モンゴルとの国際歯科医療交流」日本歯科評論　Vol.68　No.2，No.3／2008
・「モンゴルの子ども達の健康を守るために」小児歯科臨床　Vol.18　No.3／2008
・「モンゴル遊牧民に学ぶ歯の健康と歯科疾患」デンタルハイジーン Vol.35 No.7，No.8／20

参考動画；

・「モンゴルにおける日本の歯科医療」1994 年　NHK　アジアマンスリー
・「モンゴルにおける口腔保健活動の取り組み」1999 年　小児歯科学会中四国地方会ビデオ発表
・「アジア生協基金 DVD モンゴルでの歯科活動」2006 年 9 月
・「エネレルの歌」2009 年　エネレル歯科医院開設 15 周年式典
・「子どもの虫歯予防」2012 年 9 月　南ゴビテレビ　教育番組

ROSAS Rotary Operation Share a Smile
ロータリー 一緒に笑顔大作戦
フィリピン口唇口蓋裂手術ボランティア

神奈川歯科大学南東アジア支援団
河野伸二郎

演者は小学5，6年時インドのコルカタで過ごしました。貧富の差を目の当たりにし社会人になりましたら発展途上国のお役に立てることができればと考えておりました。

神奈川歯科大学を卒業後，2年目に大学の先輩らがフィリピン，セブ市で歯科ボランティア活動をされていると知り第4回プロジェクトより参加させていただきました。昭和62年当時は抜歯が主です。地域の発展とともに食の欧米化としょ糖の消費増大はう蝕の多発をまねきます。無料歯科診療では到底追いつかなくなり，小学校を中心に歯科衛生士を常駐派遣し歯ブラシ指導，フッ素洗口等の公衆衛生活動を始めました。小学校での検診の折，約1％の児童に口唇口蓋裂がみられ，その多さに驚きました。すでに他国でこの種の手術ボランティアをされている神奈川歯科大学口腔外科教授久保田英朗先生にご相談し1998年より事業の準備を始め2000年に第1回が実現いたしました。以来毎回25名ほどの患者さんの手術をしてきました。

実現には，様々な困難がありましたが，医療免許の取得が最も高いハードルだったように思われます。すでに10年以上，当地で一般歯科治療ボランティアを行っており，現地行政と良好な関係を築いていたことと，素晴らしいカウンターパートを得ていたことが解決の最大理由でしょう。

今回は，コロナ禍中断後，再スタートしました2023年のプロジェクトをご説明させていただき，口唇口蓋裂手術ボランティアに携わり20年，歯科ボランティアにかかわり35年を通じて感じた国際協力についてお話させていただきます。

サモアでフッ化物洗口

ルマナイサモア
古瀬 大治

《サモアで行ってきたこと》

〈対象〉
サバイ島　サイピピ小学校
　　6歳～13歳　8学年 約160名

フッ化ナトリウム洗口　週一回法
　現在は中断している

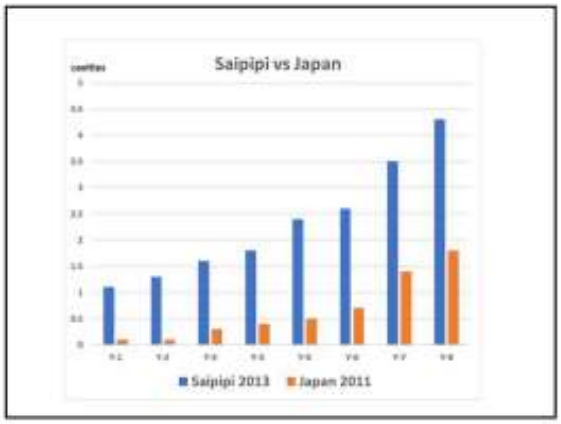
《サモアの歯科》

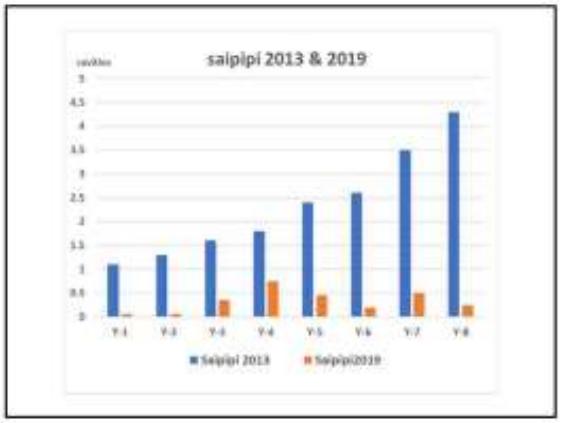
○本島 首都アピア 国立病院 歯科
　歯科医師約13名
　デンタルセラピスト約20名
　歯科技工士2人
　診療台9台＋3（最近日本からの援助）
○首都アピア 開業医2名
○隣の島(サバイ島)の地方病院に3名歯科医師

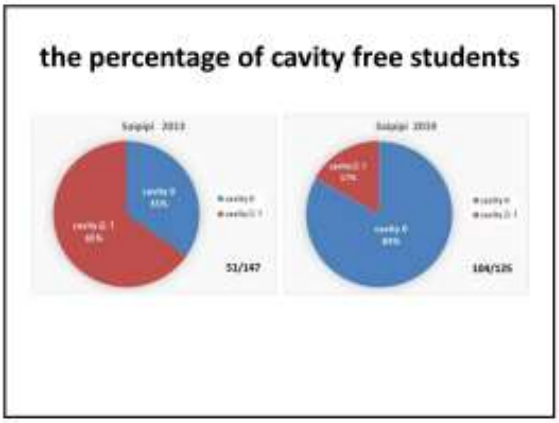
治療は充填処置や抜歯が多い

《経過》

①2012年6月サモア訪問
②2012年11月サモア訪問
　予防活動根回し開始　許可得る
③2013.4　1回目診査
④2013.9　フッ素洗口開始
・・・
・・・
⑱2019.9　saipipi結果説明
⑲2023.5　サモア4年振りに訪問


Saipipi vs Japan
Saipipi 2013
Japan 2011


saipipi 2013 & 2019
Saipipi 2013
Saipipi2019


the percentage of cavity free students
51/147
104/126

今後の予定

2023.5ツアシビ病院を訪問し、歯科医師たちと協議

サバイ島のツアシビ病院の歯科をベースに、サバイ島住民を対象にサモア人歯科医師と協同して予防活動や歯周治療を開始する

ツアシビ病院歯科
3人の歯科医師
2人のデンタルセラピスト

ツアシビ病院歯科

ルマナイサモア

Think Globally, Act Locally.
デンタルミラーから世界を見る
～長期・短期国際ボランティア経験から学んだことを今に活かす～

大分県歯科医師会　大分県口腔保健センター　常勤歯科医師
日本小児歯科学会　小児歯科専門医
九州大学歯学部　非常勤講師
福岡県歯科医師会　福岡歯科衛生専門学校　非常勤講師
藤瀬 多佳子

多様性を受け入れる人間力が求められる時代がやってきました。

17 年間の大学病院勤務を経て，1 度きりの人生「歯医者が日頃のぞいているお口の中から世界を見てみたい」と思い，今から 16 年前，日本国際協力機構（JICA）の海外ボランティア歯科医師として，日本から 8000km 離れた南太平洋の島国トンガ王国で過ごした2年間の体験が，多様性の器を広げる素地となりました。トンガに携えて行ったものは，それは，ありのままの自分と古今東西老若男女共通の健康の価値観でした。プロフェッショナルな技と経験を軸に，現地の人々とともに問題を解決し創造を楽しむ。その過程は，自分が変わり世界が変わるプロセスでもありました。帰国後は，福岡市西区の一般歯科医院で勤務医をしながら，院長先生のご理解の元，短期的にベトナム，カンボジア，アフリカのスーダンに赴いて，NGO の方々と協働して医療支援活動にも従事しました。また，勤務先が九州大学伊都キャンパスに近かったこともあり，留学生の間に「英語が通じる歯科医師がいる」ということが口コミで広がり，この 13 年間に診療した新規外国人患者数は，世界 54 カ国 390 名以上に上りました。それらの経験を通じてわかったことは，体のつくりは同じでも，口の中には，食，宗教，生活習慣など，その国の文化が反映されているということでした。異文化を理解し相互理解を深め，共に生きることは，昨今，地球上の人類が直面している脅威や紛争を回避する一歩になるとも考えられます。また，自然災害，人的災害に見舞われても，人間は生きている限り食事をします。「医者は命を救い，歯科医は人生を救う」という名言がありますが，どんな世でも，咀嚼器官の健康を守る歯科医師は必要とされる仕事です。

日本の国際協力の歴史は，戦後，日本が被援助国として目覚ましい復興を遂げ，援助国に成長したことに端を発します。

持続可能な援助とは？

ボランティア経験を活かした社会貢献とは？

Think Globally, Act Locally.

私の国内外での経験を元にお話しさせていただき，刻々と変わりゆく世界情勢の中で，歯科医療のプロフェッショナルとして，どう生きるか，考えるきっかけになればと思います。

☆紙面発表

カムカムクメール　沼口 麗子

ネパール歯科保健医療協力会

○根木規予子　白田千代子　深井穫博

ネパール歯科保健医療協力会(ADCN)は 1989 年より、2020 年 1 月までの間に 32 回の現地活動を行ってきた。初期は診療活動を中心に行ってきたが、近年は現地カウンターパートである Well-Being Nepal アミット先生を中心に、ネパール人の自立支援活動として、現地口腔保健専門家(COHW)養成事業を重点的に行ってきた。

↑口腔保健専門家養成事業の様子

2020 年度以降、現在に至るまで、コロナ禍の影響により全ての現地派遣活動は中止となったが、オンラインによる定期的な ADCN と COHW との協議を通し、現地口腔保健活動支援を継続し、自立支援活動の促進を図ってきた。

2022 年度は、36 次ミッションを 2 日間の日程でオンラインにて実施した。1 日目は COHW メンバーに加え、現地学校教員やマザーボランティアも参加し、

↑　マザーボランティアによる手洗い指導

ワークショップ形式で開催した。口腔保健に対する関心と重要性の認識は世界中で高まってきていることや尿路感染症について日本人が講義を行った。さらに COHW メンバーからも活動報告を行った。

2 日目は学校教師、マザーボランティアを対象に COHW メンバーが対面にてヘルストレーニングを行い、冒頭とまとめの議論に ADCN がオンラインにて参加した。

↑コロナ禍前のフッ素洗口事業の様子

両日の議論は、2022 年の振り返りと共有、および 2023 年の活動計画であった。コロナ禍で中断していた母子保健、高齢者保健プログラムの再開と一部 COHW メンバーで再開したフッ化物洗口を全学校で再開することであった。

これらの情報は 32 次ミッション(2018 年 12 月 28 日～2019 年 1 月 5 日)においてに MOU(連携に関する基本合意書)を提携したゴダワリ市とも共有した。

↑コロナ禍の下で健康・口腔保健啓発ポスターをゴダワリ市長 Gajendra Maharjan(右)へ手渡すアミット先生(左)

ゴダワリ市長の Gajendra Maharjan は、ＡＤＣＮの活動を子どもの頃から体験的に知る人物で、共同基金を開設し、合理的な財政運用を目指していく。

今後は COHW による主体的な現地活動をさらに推進するための運営強化として、活動計画・活動内容の記録・文章化をさらに促進することとが課題として挙げられる。現地歯科医師との連携については引き続き協議することになった。さらに ADCN 現地派遣を実現し日ネ双方のモチベーションの維持を図っていく。

トンガ王国における南太平洋医療隊の国際協力

南太平洋医療隊
内田　千鶴

南太平洋医療隊は 1998 年よりトンガ王国（以下トンガ）にて外務省，埼玉県国際交流協会の補助金，JICA の草の根共同事業や自己資金にて活動をしています。

現在，トンガの国立病院は本島，離島併せて 5 ヶ所，ヘルスセンターが 3 ヶ所あり，40 人前後の歯科スタッフ（歯科医師，デンタルセラピスト，デンタルナース，技工士）が歯科医療に従事しています。

当初，トンガの歯科医療状況は不十分で医療費は国が負担しているため，歯科も無料で受診できましたが，義歯制作や保存治療など，処置によっては有料でした。設備不備，器材不足，また患者自身も時間をかけずに解決する抜歯を選択していました。早期に喪失歯が多い状況に鑑み，食育や予防歯科教育が必要と考えました。小学校・幼稚園・障がい者施設において歯科健診，歯科保健指導，フッ化物応用等，う蝕予防を中心とした活動を行いました。

後にトンガのカウンターパートとなる歯科医師のシシリア先生が 2000 年より来日し，日大松戸歯学部にて学位取得のためのサポートを行いました。

現在，トンガではシシリア先生が歯科部長に就任し，主導のもと歯科保健活動が行われており，フッ化物洗口事業，歯科健診は全幼稚園・小学校で滞りなく自立して継続されています。（12 歳児 2000 年 DMFT4.9/ 2017 年 DMFT1.08）

トンガの人々の日常生活に溶け込んだ予防システム作りが定着した要因は，保健省・教育省の実務者と協力して活動が進み，国の指導的立場にいる人々の協力のもと，国の政策に反映されたことが大きいと考えられます。

トンガでは糖尿病（Ⅱ型）や，心循環器疾患等の生活習慣病罹患者が多く，医療が逼迫していました。トンガ人の健康増進のためには歯科疾患のみならず，全身的な疾患にも目を向けなければならないと考え，口腔保健のアプローチから生活習慣の改善に取り組みました。特に歯周病と糖尿病は相関関係にある為，歯周病治療及び予防に重点を置きました。

当時，トンガでは口腔清掃や指導が出来るスタッフがいなかったため，病院内で現地歯科スタッフが自立して歯周病治療及び予防が出来るように，作成したマニュアルを元にプロービング圧やハンドスケーラーの動かし方，ポジショニング，歯間ブラシの使い方等を細かく丁寧に説明しながら技術移転をしていきました。

2013 年に本島の国立病院は日本政府により無償で新たに建て替えられました。それを良い機会に，超音波スケーラー等の資機材を導入し歯周病治療用のユニットを確保しました。始め使用できるユニットは 1 台のみでしたが，歯周病治療の必要性が理解され，すぐに 2 台になりました。

歯科受診時の血圧測定値が高い患者には医科の受診を勧めました。また，医師と管理栄養士の理解を得て，糖尿病外来での待合スペースでも歯科と糖尿病の相関関係について歯科スタッフが保健指導を行い，歯科受診を勧めました。

妊産婦健診では唾液潜血反応テスト，カリエスリスクテストなど視覚で分かりやすく動機付けを行い，妊娠性歯肉炎や低体重児出産等の問題を提示して母子保健を推進しました。

病院外でも学校や職場，ヘルスセンター，町中，市場，村など人が多く集まるところで，健診及び，普及啓発活動を他職種と連携し共に行っていきました。

運動不足解消のためには，無理のないスモールステップとして，各所で NHK ラジオ体操を取り入れました。歯科室の診療前，小学校巡回でのフッ化物洗口前など，様々な場所でラジオ体操を行い，テレビやラジオ放送もされました。また，中学校，高校でも体重計，身長計，姿見を寄贈し，早期の肥満予防に取り組みました。検診時に体重が 100kg 近い生徒や腹囲が 100cm 超えている生徒もおり，同行した看護師が個別でも生活習慣，飲食習慣指導をしました。特に炭酸飲料を好む傾向にあるので注意喚起をしました。

障がい者，高齢者，有病者で通院できない人には自宅を訪問し，歯科検診，保健指導を行い，誤嚥性肺炎を予防するために，口腔清掃をしていくことの重要性を歯科スタッフに伝えていきました。

実際に様々な場所での活動は，歯科保健のみならず，身長・体重・腹囲・血圧・血糖値の測定，内科医による健康相談も取り入れたことにより，非常に好評でした。病気になって初めて病院に行く人にとっては，自身の状態を知る事で早期予防や重症化する前に気づく良いきっかけとなりました。また，活動の様子をトンガテレビ局と連携した事により，テレビとラジオ放送にて，より多くの人々に普及啓発することが出来ました。

活動を共にした看護師や保健師も病院外での健診や啓発活動の必要性に気づき，彼らのその後の活動にも取り入れられていました。

重要なことは口腔だけではなく，全身的な健康増進の為に，様々な人脈との出会いを大切にし，タイミングを逃さず多職種と繋がり連携して，必要とする助けを提供することだと考えます。歯科衛生士として必要とされる国際協力はまだまだ多く，今後も国内外で人々の健康増進のために貢献し，協議会（JAICOH）を通じて情報を共有していけることを楽しみにしております。

↑小学校にて歯磨き前のラジオ体操

↑中高健診時の身長体重測定

↑糖尿病外来の待合スペースにて保健指導

↑軍隊の職場健診に現地看護師も同行

↑市場での健診，啓発活動の様子

↑ハンドスケーラーのシャープニング指導

最後に，トンガ沖海底火山噴火による津波の被害に寄せられた多くのご支援へ感謝を述べさせていただきます。2022 年 1 月 15 日，トンガ王国の海底火山で起きた大規模な噴火により津波が押し寄せました。海沿いの建物が倒壊したほか，海底ケーブルが損傷して電話やインターネットの通信が困難になり，火山灰で飲み水が影響を受ける等，トンガ全土に被害が出ました。現在トンガは復興回復に向かっており，津波対策等インフラ整備に取り組んでいます。ご支援いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

☆資料

国際歯科保健医療協力 NGO ダイレクトリー　2019 年版

HP（https://www.jaicoh.com/）から，2019 年版のダイレクトリーが閲覧できます。よろしければご覧ください。

演者決定(第2報)!!

第9回日本国際歯科大会2023

The 9th World Dental Meeting in Japan 2023

大会テーマ

No Dentistry, No Wellness!

継承と革新から創造する歯科の未来

【期　日】2023年９月29日(金)～10月１日(日)

【会　場】パシフィコ横浜

【併　催】World Young Dental Innovators' Meeting 2023

第９回 ワールドデンタルショー2023

遠藤眞美先生も10月1日(日)午前のご講演にご登壇されます

※2023年5月12日現在（順不同、敬称略）。演者は変更になる場合があります。国内の演者については、順次発表します。

QUINTESSENCE PUBLISHING

主催：クインテッセンス出版株式会社

後援：公益社団法人 日本歯科医師会／公益社団法人 日本歯科技工士会／公益社団法人 日本歯科衛生士会

日本歯科医師会生涯研修受講単位：14単位(9月29日)／14単位(9月30日)／15単位(10月1日)の合計43単位

日本歯科衛生士会第５次生涯研修制度特別研修指定

THE NIPPON DENTAL REVIEW

日本歯科評論

国際協力の活動を通して，地域・分野の垣根を越えたワールドワイドな歯科医療や医療，公衆衛生に関するさまざまな情報を“World Health Report”で連載しています！！

【連載担当執筆者】

・小川祐司先生：新潟大学 予防歯科学分野 教授
・牧野由佳先生：WHOアフリカ事務局 テクニカルオフィサー
・村井真介先生：国立国際医療研究センター国際医療協力局 運営企画部
・清原宏之先生：国立国際医療研究センター国際医療協力局 運営企画部
・遠藤眞美先生：日本大学松戸歯学部 障害者歯科学講座
・久保田 悠先生：神奈川県立保健福祉大学 ヘルスイノベーション研究科

【2023年掲載内容】（敬称略）

1月号　歯科もカーボンニュートラルの時代へ（清原宏之）
2月号　WHO協力センターを通じた国際口腔保健活動（小川祐司）
3月号　WHO世界口腔保健レポート（牧野由佳）
4月号　グローバルヘルスへの関わり方―日本の行政の立場から（村井真介）
5月号　ユニバーサルヘルスカバレッジ（UHC）推進が改めて教えてくれたわが国の歯科医療の功績（遠藤眞美）
6月号　カンボジアにおける非歯科専門職（Non-dental healthcare worker）による口腔保健活動（久保田　悠）
7月号　あらゆる形態の栄養不良をなくし，食料安全保障を解決できるか―人類に問われている栄養の課題（清原宏之）
8月号　WHO世界口腔保健レポート「西太平洋地域（WPRO）サマリー」（小川祐司）

月刊『日本歯科評論』https://www.hyoron.co.jp
株式会社ヒョーロン・パブリッシャーズ

第 33 回歯科保健国際協力協議会（JAICOH）総会・学術集会

発行日：2023 年 7 月 2 日
発行者： 歯科保健医療国際協力協議会（JAICOH）
連絡先： jaicoh2023@gmail.com
HP： https://www.jaicoh.com/

無断転載・複製・複写を禁じます。